

比較思想研究

第41号

特集 1 「共生の思想——中村元の「慈悲」の思想をてがかりに」	1
前田 専學 趣旨説明	1
春日井真英 「聖なる空間」の象徴としての「蓮華」あるいは「華」	3
頼住 光子 日本思想における「共生」	9
丸井 浩 インドの寛容精神と包括主義	18
特集 2 「思想としての生命 第一回 出生と生命」	31
沖永 宜司 パネル企画「思想としての生命」趣旨説明	31
田中かの子 いのちの「ありのまま」を引き受ける、という原則から	34
安藤 泰至 この世に生まれてくるということ	40
金子 昭 人間的生命の出生をめぐる哲学的人間学の試み	46
特集 3 「今、比較思想の方法論を問う 第一回」	63
保坂 俊司 東京例会における「白熱パネル」設立趣旨説明	63
末木文美士 今、比較思想を問う	64
廣澤 隆之 比較思想のあり方を問う	69
沖永 宜司 探究の方法としての比較思想	85
〈研究論文〉	
菅原 令子 「會根崎心中」に対する「悲劇」という評価について	71
増田 敬祐 和辻倫理学「間柄」とハンス・ヨナス「乳飲み子」の倫理の検討	80
橋 稔 中村元「東洋人の思维方法」	88
森村 修 「性的差異」のケア倫理学	96
小瀨 聖子 禅浄双修の是非に関する比較思想的考察	106
佐々木一憲 「涅槃」(ニルヴァーナ)は「不動心」(アパチチヤ)か	116
吉村 均 和辻哲郎とナーガールジュナ	124
小松 優香 全体論的個人主義としての「負荷有りし自己」と「被置結構の自己」	134
〈研究例会〉	
東京地区 (石田恵理、高橋勝幸)	144
東海地区 (Felipe Ferrari Gonçalves、菅原研州)	151
北陸支部 (浅見洋)	159
近畿支部 (目黒香子、師茂樹)	163
比較思想研究の動向	171
会報	192
欧文要旨	i

比較思想学会

2014

Studies in Comparative Philosophy

No.41

Contents

Section 1: A Philosophy of "Kyosei" (Co-existence) with a Special Reference to the Philosophy of "Jin" (Compassion) of Nakamura Hajime	1
Section 2: From Form as Symbolical Images of Holy-sphere to the Idea of Symbiosis: A Study on Japanese Thought of Symbiosis	3
Section 3: A Reflective Note on the Idea of Indian Tolerance and Inclusivism in the Thought of the Late Doctor Hajime Nakamura's Eyes of Compassion as a Thinker	18
Section 4: Life as a Thought (1): Birth and Life	32
Section 5: The Aim of the Panel Project "Life as a Thought"	34
Section 6: On the Principle of Giving Birth to the Unborn Life As It Is	34
Section 7: The Meaning of being Born into this World	40
Section 8: An Account of Philosophical Anthropology on the Birth of Human Life	46
Section 9: The Methodology of Comparative Philosophy Re-examined 1	52
Section 10: A Proposal to Recopen a New Program at Tokyo Branch's Work	54
Section 11: Challenging Comparative Philosophy Today	54
Section 12: A Critical Self-understanding through the Studies in Comparative Philosophy	60
Section 13: Comparative Thought as a Method of Inquiry	65
Section 14: A Comparative Study of Chikamatsu Monzaemon's Domestic Puppet Plays	71
Section 15: A Comparison between "Aidagara" (Relationship) in	
Yin-yang's Ethical Theory and the Ethics of the "Infant" of Hans Jonas	80
Section 16: "Ways of Thinking of Eastern Peoples"	88
Section 17: The Care Ethics of Sexual Difference	98
Section 18: A Study on the Dual Practice of Zen and Pure Land	106
Section 19: Identical to "Apathia"?	115
Section 20: Yasuro Watsuji and Nagarjuna	124
Section 21: A Comparative Study of Charles Taylor's Concept of the "Encumbered Self" and	
Section 22: Holistic Concept of the "Self of Balanced Control of Desires" as a Holistic Individualism	134
Section 23: Katsuyuki TAKAHASHI	144
Section 24: Kenichi Iwasaki, Kenichi SUGAWARA	151
Section 25: Kenichi SUGAWARA	159
Section 26: Shigeo MORO	163
Section 27: Kenichi SUGAWARA	171
Section 28: Kenichi SUGAWARA	192
Section 29: Kenichi SUGAWARA	i

Japanese Association for Comparative Philosophy

March, 2015

ISSN 0286-2379

であるか、意識まで丹念に仕上げなければならない。それで、疑いもなく、我々は、合理的能力をかなり「追求する」。我々を取り巻く自然との関係において、例外なく我々が追隨する価値体系を構築しつつ、尽きることのない好奇心を満たしつつ、それは我々の生の意義の探究である。

こうした理由で、我々は、この独創的方法の哲学と科学の再考は、著者の概念のさらに十全かつ濃縮された体系にまで拡張することを正に信じる。
(ミラン・タンク、原文は仏語)

HASHI Hisaki, Cognition Embodied in Buddhist Philosophy—A Comparative Reflection of Dōgen and Heidegger, *Philosophy Study*, vol.4, no.2, pp.136-141, Feb. 2014, David Publishing Company, New York. ISBN2159-5313 (Print) ISBN2159-5321 (Online) (仏教哲学における身体化される叡智—道元とハイデガーについての比較考察)

「日本の生んだ最も偉大な哲学者のひとり」とも言われる道元は、修行と悟りに軸足を置きつつ世界や自己について根源的に問うており、その思索は哲学的吟味に十二分に耐え得る包括性、論理的・一貫性、透徹性を持っている。それ故に、これまで田辺元の『正法眼蔵の哲学私観』(一九三九年)をはじめ、西洋哲学との比較が盛んに行われてきた。中でもハイデガーとの比較は、両者の時間論の比較をはじめ様々な観点から行われている。比較思想学会関係でも、笠井貞氏や井上克人氏が両者の比較思想に取り組み、論者もかつてハイデガーの *Freigels* と道元の「性起」とを比

捉えているということである。第5章「超越的真理」としての認識か、それとも「身体」としての認識か?—哲学の対話における身体化される叡智」は本論文の眼目となる章であり、特に道元について「身体化される叡智」の問題がクローズアップされる。これは、瞬間ごとに刹那生滅する身体において、自らが得た叡智を具現化していくことの重要性の指摘と言えよう。ハイデガーにとって日常性は死を隠蔽した頓落であったのに対して、道元にとっては日常の実践こそが自らがダルマを顕現することであったのだ。そして第6章「結論」では、再び道元にそつて「身体化された叡智」の問題が取り上げられ、それが日常の実践における本来の自己の継続的顕現であることが確認されるとともに、この観点からのハイデガー哲学における「内在」の再評価の可能性が示唆される。

以上簡単に概観したように、橋氏は、道元とハイデガーの「生死」観に関する比較を通じて「身体化する叡智」という重要な概念を導き出した。この「身体化する叡智」は橋氏も指摘するように、今後のグローバル世界において、東洋が西洋に提案するのみならず、東西の哲学の対話の場を切り開き得る示唆に富んだ考え方である。橋氏の思索のさらなる展開を期待したい。(頼住光子)

Hisaki HASHI, "Der Machiavellismus von Ost und West. Philosophie zur Macht und Strategie bei Machiavelli, Hanfeizi und Sunzi" (KoPhil Bd.1), Verlag Dr. Kovac Hamburg 2014.

教授職にあるウイーン大学を拠点にしてグローバルに活躍している著者の橋博士は、いま最も注目される世界的哲学者の一人

較する小論を公にしたことがある。

本論文において、道元とハイデガーの生死観を手がかりとして「身体化される叡智」という魅力的なテーマに取り組んでおられるのは、本学会会員である橋博士(はし ひさき)氏である。橋氏はウイーン大学を拠点として、比較思想を中軸に据えた研究活動を幅広く展開しており、その一端は、近年の『比較思想研究』の研挙動向欄からも見てとることができる(第三七号、第三八号、第三九号など)。また、今年度松江市の中村元記念館で開催された比較思想学会第四一回大会において、グローバル化世界における比較思想研究の意義について意欲的な発表をされたことは記憶に新しい。

さて、本論文の要旨を私なりに追ってみよう。まず、第1章「現象学と仏教哲学—本論文の主要な論点」では、比較を可能にする前提として、両者がともにリアルな事象、すなわち我々の生の経験そのものを探求しようとする現象学的態度を取っていることが指摘される。第2章「ハイデガーにおける「生と死」の関係—存在と時間」と第3章「生死」の問題への道元のアプローチ—「正法眼蔵」では、ハイデガーと道元の生死観の特徴がそれぞれ説明される。

以上を受けて、第4章「ハイデガーと道元による「生死」という問題の精査—比較思想による新たな理解の誕生」では両者の異同が解明される。特に橋氏が強調するのは、ハイデガーが生と死とを二元対立的に捉えているのに対して、道元は無常観、刹那生滅観を基礎として生と死とを切り離し得ない統合的なものとして

である。その斬新な発想、学際的な視点、因習にとられないエネルギー的な行動力は、女性の力をまだまだ活かしてない日本の社会が、二一世紀を生き延びるための希望の星と言えよう。

その著者が、本書『東洋と西洋のマキアヴェリズム—マキアヴェリと韓非子と孫子における力と戦略の哲学』(仮訳)で、現代の政治哲学に関して新たな展望を切り開こうとしている。従来、政治哲学は、プラトンやアリストテレスや孔子を範とし、マキアヴェリや韓非子を否定的に評価してきた。徳の高い君主が支配する理想的な真の政治哲学と、権謀術数を極めた現実的な政治的哲学とに、政治哲学を二分してきたのである。

しかし、今、著者は、その境界を打破しようとする。国境に縛られないインターネットのデジタルでグローバルな普及が、近代国家の主権と基盤を揺さぶり、人権意識の普遍性をも揺るがしつつある現在、二一世紀の政治哲学は、マキアヴェリや韓非子の思想を再評価すべきではないか、と訴えるのである。西洋と東洋が、キリスト教圏とイスラム教圏が、資本主義圏と旧共産主義圏が、せめぎ合うヨーロッパの伝統ある中位国オーストリアで、多くの難民に混じって異邦人として人生を生きる著者ならではの視点も、随所に光っている。

イスラム国とテロリズムが日本人すべてを標的にすることを一方的に通告してきた現在、もはや、現実政治に失敗したプラトンや孔子のみを顧みるわけにはいかない。ひとりひとりの日本人が生き延びるために、地球上のすべての人びとの生命と人権が現実

の居場所を守られるために、マキアヴェッリから、韓非子から、そして孫子から、私たちは何を学ぶことができるのか。そのため、の絶好の手引書が、本書なのである。エキサイティングな内容は、試訳してみた以下の、緻密な目次構成と内容からも十分に窺い知れよう。

第二章 方針の定位

第二章 「政治的哲学と戦略」の現代的意味

―マキアヴェッリ、韓非子、孫子

第三章 孫子解釈に対する批判的注釈

―孫子の学説は古代の単なる「戦場での戦略」なのか？

第四章 比較思考法の重大性に関して

第五章 「間人関係」のネットとしての世界

第六章 力と支配権と合法主義

第七章 権謀術数(その一)

第八章 権謀術数(その二)

第九章 存在と外観―偽の政治

第十章 安利と危害

第十一章 孫子の戦略の「道」

第十二章 根元悪―それらの因果関係と決定

第十三章 根元悪に逆らう「政治的哲学」の道

第十四章 政治の謎―哲学の地平から

以上が本書の内容である。読者の比較思考法を磨くべく、実意周到な構成で考え抜かれている。最後に示された、「さてマキアヴェッリと韓非子が通したものととは」という問いかけは、本書

の読者諸氏に向けられる。決定論が空虚にしておいた第四の次元をどう充実するかは、読者それぞれの生き方に関わってくるのではないかと著者が投げかけてくる。本書のどこかに答えが示されているので、ぜひ一読して自分の目で確かめられたい。

実践理性、経験の類推、様相のカテゴリー、合法性、根元悪など、カント哲学全般の主要概念を隠し味にして、図表も用いながら、古今東西の思想を丹念に読み解き、心憎いばかりに読者を引き込む著者の見事な手腕は、ウィーン大学の白熱教室を彷彿させる。

考えることを学ばせ、哲学することを学ばせようとする、哲学教育の模範ともいべき本書であるが、論旨そのものは一貫している。著者によれば、現実世界と現実政治に関するマキアヴェッリの諸理念は、政治的哲学の標準となる基本モデルを創設した。類似した思考モデルは古代の中国哲学にも見られる。一つは韓非子の厳格な合法主義であり、悪を克服しようとする認識論に拠っている。もう一つは孫子の戦略であつて、類推思考を、安利を求めて止まない人間の社会(ゲゼルシャフト)生活に関連づけている。

東洋と西洋の、両方の道が指し示すのは、分別と実用論と戦略の統合である。「東アジアの思考道(Denkweg)」は、単なる実用論や戦略でなく、思考と行動が知恵の生活において一体化される多くの道筋を伝承する。

このようにして著者は、西洋哲学と倫理学を自家薬籠中の物としながら、果敢に、政治哲学と中国古代哲学の通説に切り込み、

新生面を開いた。まさに比較思想の醍醐味を本書が味わわせてくれる。なお、第二巻として本書が劈頭をなすKOPPE叢書は、二〇〇八年に著者がウィーンに設立した「比較哲学学際教育協会」が発行している。(平田俊博)

2 比較思想関係の講座・学会・研究会

第十四回ヨーロッパ日本研究協会国際会議報告

二〇一四年八月二十七―三十日、スロベニアのリユブリャナ大学で開催された第十四回ヨーロッパ日本研究協会(European Association for Japanese Studies; EAJIS)国際会議において、思想史・哲学部会の基調講演者として参加したので、報告したい。

EAJISは、ヨーロッパの日本研究者の交流をはかるために一九七三年に設立され、さまざまな活動を続けているが、その中心となるのは、三年ごとにヨーロッパのさまざまな都市を回って開催される国際会議である。回を追うごとに大規模になり、今回の参加者は約九百名にのぼる。

第一日目は、開会式に引き続いて、柄谷行人氏による全体の基調講演が行われた。氏の講演は、「歴史的段階としての新自由主義」と題するもので、英語で行われた。第二―四日目に部会に分かれての発表が行われた。部会は基本的には、都市・地域・環境・言語・文学・美術・人類学・社会学・経済・歴史・宗教・哲学・政治・日本語教育の十であるが、その中でさらに部会が分かれるものがあり、また、領域横断分野があるので、全体では十五部会

に及ぶ。

私が関係した思想史・哲学部会は、第八部会の宗教・哲学部会の下に属し、従来は一部会で行われていたが、今回からa宗教、b思想史・哲学の二部門に分けられた。思想史・哲学部会の責任者は、J・ポート氏(ライデン大学名誉教授)とラシ・シユタイネック氏(チューリッヒ大学教授)である。ポート氏は近世思想の専門で、ライデン大学で多くの研究者を育てており、シユタイネック氏は道元などの仏教哲学のほか、環境倫理やカッシーラ哲学の批判など、現代哲学の分野でも活躍している。

私の基調講演は第二日目の最初(第一セッション)で、「哲学と思想史」(Philosophy and the History of Thought)というタイトルで、日本語で行った。日本で「哲学(史)」として理解されるものと「思想史」との関係や、日本の前近代の思想をどのように現代の哲学に生かすことができるか、などの問題を広い観点から論じた。その後は、以下のようなテーマでセッションが設けられ、それぞれ一時間半で、発表者三人ずつで行われた。

(第二日) 2「仏教哲学? 古代・中世仏教思想」、3「日本仏教哲学における真正の存在と行動」、4「世俗化の時代? 江戸から平成までの「世俗」の探究」

(第三日) 5「不干斎ハビエアのキリスト教、仏教、儒教、神道観」、6「続き、ならびに江戸時代に関する論文」、7「近代日本のリベラリズムにおける儒教と「文明開化」」、8「続き、ならびに近代に関する論文」

(第四日) 9「十八、十九世紀における古典の文献学的・注釈

Romeo and Juliet, who love each other in *Romeo and Juliet*, are happiest when they are together, alive. They can be ideal when they are alive.

A tragedy represents nobility of humanity paradoxically by expressing human limits. It is from *Poetics* written by Aristotle. It is based on Aristotle's ethical thought that a human has his own virtue (*areté*). The characters of the Greek tragedy and the Shakespeare's tragedy are great people such as kings, heroes and a distinguished family people who belong to the noble class. They are born to have virtue and to be happy. They can be ideal when they are alive. As they have to die for their righteousness or their love, these plays should be called tragedies.

On the contrary, Chikamatsu's puppet plays are based on a thought that human cannot be great as long as he remains human. Characters of domestic puppet play are helpless to do anything. They are courtesans, lower merchants and sometimes lower samurais. Their hope is fulfilled after their death. Therefore, when they want to be honest in their life, they actively kill themselves. Humanity expressed in domestic puppet plays is lowliness and strong yearning for ideal.

Therefore, we think it is not appropriate to evaluate Chikamatsu's domestic puppet plays as tragedies. If we evaluate Chikamatsu's domestic puppet play, Greek tragedies and Shakespeare's tragedies based on the same concept, we should study each play individually and should find the new provisions of human being.

A Comparison between "Aidagara" (Relationship) in Watsuji Tetsuro's Ethical Theory and the Ethics of the "Infant" of Hans Jonas:

The Possibility of "Intergenerational Ethics" in Environmental Ethics

Keisuke MASUDA

This paper compares the work of Germany-born philosopher Hans Jonas and Japanese ethicist Tetsuro Watsuji on the responsibility of future generations. Responsibility is the most important issue in the field of environmental ethics and when dealing with environmental problems—how responsibility for the future is shared among the present generation.

Jonas and Watsuji both believed that the parent-child relationship is the foundation for responsibility. However, they differ with respect to the communality necessary to responsibility. Jonas believed that communality is formed based on the social responsibility of politicians. Therefore, it is important for the nation-state—as a unit—to think about communality from Jonas' viewpoint. Watsuji, however, believed that communality is formed by family relationships and the responsibility they entail, and this communality expands into "the nation state."

Jonas and Watsuji's concepts are very different from conventional ethics, and their arguments clarify how ethical responsibility can be cultivated and inculcated in society. However, their two theories differ on one point—the understanding of communality that binds the nation-state as a unit.

This paper suggests that it is important to discuss not only the nation-state as a unit or a private individual, but also the viewpoint of local communities (or intermediate groups) when considering communality.

NAKAMURA Hajime: "Ways of Thinking of Eastern Peoples"

—A Question and Proposal to the Global World

Hisaki HASHI

The main work of NAKAMURA Hajime (1912-1999, Prof. Dr., the founder of the Japanese Association for Comparative Philosophy), "*Ways of Thinking of Eastern Peoples*" should be reconsidered in our globalizing world. If the "Thinking Method of a certain Nation xx" is to be firmly categorized in our century, it is not free from problems, because a "typological 'frame work' thinking" might reduce the original liberty of human thought. Yet, by reading through Dr. Nakamura's work we are impressed by the enormous power and the flexibility of his logics—the "polemos" to confront different thinking systems in the human world, unbroken by changes in social phenomena. It remains a criterion of "universal truth" in the 20th century.

Living in the 21st century, we experience a drastic development of globalization. Peoples encounter also difficulties in communication between different cultures and nations. "Intercultural thinking" has been postulated in different world regions since 1980, though this postulation cannot solve the problems of the intercultural clash: the fundamental difference of thinking principles, the different construction of logics, ethics and pragmatics. These problems can hardly be solved by a way of thinking typical of a previous era. The absolutism of *one* "universal" culture is centralized in a frame category—"world globalism". One of the most conspicuously lacking aspects in this thought system is "*Comparative Thinking*".

In different cultures, languages, religions etc., many principal concepts are generally positioned differently in the respective societies and social environments. Even if a concept is translated correctly into another language, with an eye to *syntax and semantics*, the translation process will not necessarily be successful, unless a third aspect, namely *semiotics*, has been considered: "How is the concept positioned and used by the members of the nation and society, in its original cultural topos?"—The approach of *Comparative Thinking* has turned into a *fundamental method of philosophy*.

Previously, efforts were made in Comparative Philosophy to compare systems [A] and [B] out of their environment, analyzing and counting their differences or common elements, as an "objectivist observer" would do. However, Comparative Thinking uses another level of approach: We, as thinkers, position ourselves "*between*" the different systems [A] and [B]. This positioning, the "Field of 'Between'" is the topos which enables an *Inter-Action* of the systems [A], [B] and our thinking [S]. Our thinking [S] presents the common problem of [A] and [B], placing ourselves one time into the system [A], another time into [B]. The confrontation of [A] and [B] ([non-A]) is executed dialectically and finds an integrative solution, whereas we construct our own system [S] in the "Field of *between* [A] and [non-A]".

Hereby the [S] is valid as the topos of the "Intra-Relation of [A] and [B]": the "corpus" which actualizes a phenomenon of truth in our life. Based on the thought of Dr. Nakamura, the significance of a reconstruction of Comparative Philosophy in our globalized world is expounded in my discourse.

The Care Ethics of Sexual Difference: The Problem of Corporeality
in Watsuji's Ethics of Betweenness and Irigaray's Ethics of Sexual Difference

Osamu MORIMURA

This paper considers "the embodied ethics of care" by comparing the notion of embodiment in E. McCarthy's *Ethics Embodied* (2010) to Watsuji's "ethics of the betweenness" and L. Irigaray's "ethics of sexual difference." I regard the embodied ethics of care as the first stage in a metaphysics of care, since caring is inseparable from the sexual body of the other and since the ethics of care is concerned with the fundamental question of defining care, or more correctly, taking care of the sexual bodies of others. In fact, according to Irigaray, sexual dissimilarity, which is ontological, is the most important difference. Watsuji's ethics of betweenness criticizes the Western tradition of individualism, which includes Irigaray's feminist philosophy and emphasizes the betweenness of persons in unifying the self and others. At first sight, these two views seem to conflict, but McCarty attempts to integrate the ethics of these philosophers, based on the concept of embodiment. This paper discusses and supports McCarty's challenge to Irigaray and Watsuji. Finally, I mention that her embodied ethics of care requires a metaphysics of care, which is directed not only to all existent beings but also to all beings that have existed in the past and will exist in the future. In this sense, the subjects of care should not be limited to human beings. Therefore, metaphysical thinking is required in the ethics of care, and a metaphysics of care is urgently needed.

A Study on the Dual Practice of Zen and Pure Land: Hakuin's Critique of Yunqi Zhuhong

Seiko OBAMA

This paper deals with Hakuin(1686-1769)'s critique of Yunqi Zhuhong(1535-1615)'s interpretation of the Platform Scripture of the Sixth Patriarch which is Zen scripture and has references to Pure Land sutras.

As was widely known, the Pratyuppannasamadhi-sutra which is one of the early Mahayana Sutras teaches praying to Amitabha in Pure Land in order to lead a prayer to dive into deep dhyana-samadhi (Zen state) and see the Buddha. It means that Zen Buddhism has many affinities with Pure Land in the practical way of mindfulness of Buddha Samadhi.

Theories of the dual practice of Zen and Pure Land Buddhism developed in Chinese Buddhism. Yunqi Zhuhong, a Chinese monk of the Ming Dynasty, seems to be one of the great Zen monks who made a big theory. Even though Zhuhong is a Zen monk, he asserts that a

Buddhist should put oneself to invoke the Buddha. Zhuhong considers that Zen practice equals to praying to Amitabha logically, and recommends the dual practice of Zen and Pure Land.

Hakuin, who is a famous Japanese Zen monk, agrees with his consideration because both practices lead a practitioner to deep dhyana-samadhi. However, Hakuin never approve the dual practice. He thinks that a Zen practitioner has to devote oneself to Zen practice especially Koan which is Zen question for meditation.

Even though Zhuhong and Hakuin have different opinions, both theories finally basis on 'Jisho-no-Mida, Yuishin-no-Jodo' (Amitabha in one's own nature, Pure Land in one's mind). The main discourse of this paper clarifies that by tracing Hakuin's critique of Zhuhong's interpretation of the Platform Scripture of the Sixth Patriarch and aims to show a new prospect on comparative studies of Zen and Pure Land Buddhism.

Is 'Nirvana' Identical to 'Apatheia'?

Late 19th Century European Comprehension of Buddhism as 'Quietism' and its Context.

Kazumori SASAKI

'Late 19th century' is a monumental period when the newly advocated method of intellectual activity i.e. 'science' began to emerge. T. H. Huxley, whose last essay "Evolution and Ethics" I shall take up here, is one of the best advocates of science at that time in Europe. I will show in this paper, taking Huxley as an example, how and as what late 19th century European intellectuals accepted the new foreign religion Buddhism in the time of the emergence of modern science, and how they assimilated it to cultivate their own system of thoughts.

Promoting scientific ideas, Huxley strongly supported C. R. Darwin and the methodology of his "Origin of species." This epoch-making book gave serious impacts on wide range of the world of intellectuals then. The Roman Catholic Churches, especially, felt threatened from this new current of thought known as "Theory of evolution" or 'Darwinism'. Harsh opposition from Christian side to evolutionists caused a serious controversy between science and religion. Buddhism was then introduced into Europe as a highly ethical and scientific religion without postulating God(s). Scientists anticipated this new religion can substitute for Christianity in the up-coming science era.

Huxley played a significant role in this controversy. He took agnostic point of view regarding theodicy and insisted like this: there are neither good nor evil intentions within "cosmic process." Therefore human being had to protest against that "cosmic process" to lead a humanistic, civilized life. Man in Ancient time, however, were too feeble to protest powerful universe i.e. outer and inner nature, hence all they could do is to be self-restraint. With such understanding of Ancient religion, Huxley took 'Nirvana' as well as 'Apatheia' as the final state of 'quietism', a practice of self-restraint.

Huxley's work is a great model of the comparative study of philosophy at that time and it shows the level of achievement of Buddhist study in 19th century Europe.